

ひめゆり

2007(平成19)年6月19日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督＝柴田昌平／出演＝ひめゆり学徒の生存者22名／監修＝ひめゆり平和祈念資料館資料委員・学芸員・説明員ほか／取材期間＝1994年3月～2006年3月／プロローグ／第一章『戦場動員と看護活動』50分／第二章『南部撤退から解散命令』27分30秒／第三章『死の彷徨』52分30秒／エピローグ(プロダクション・エイシア配給／2006年日本映画／130分)

……ひめゆり学徒隊は、過去数回映画化された『ひめゆりの塔』で有名だが、それはあくまでつくりモノ。それに対してこれは、学徒隊の生存者22名の証言を基に、1945年4月から6月までの15～19歳の少女222名の生きざまと死にざまを赤裸々に語ったドキュメンタリー映画。平和で豊かな今を生きる若者たちこそ、「今、語らなければ。今、伝えなければ」という彼女たちの思いをしっかりと受け止めなければ……。

なぜ、今このドキュメンタリー映画が……？

この映画は、1994年から柴田昌平監督が「ひめゆり学徒隊」たちの体験と思いを記念として映像に残すため13年間にわたって続けてきた作業を、2時間10分の長編ドキュメンタリーにまとめたもの。6月6日に観たスティーヴン・オカザキ監督のドキュメンタリー映画『ヒロシマナガサキ』(07年)がつくられたのは、「今、作らなければ。今、伝えなければ」という思いのためだったが、それはこの『ひめゆり』も全く同じ。

総数240名(教師18名、生徒222名)の「ひめゆり学徒隊」が、南風原にある沖縄陸軍病院に看護要員として従軍したのは、1945年3月24日。当時の彼女たちの年齢は15～19歳で、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女子校の女生徒たちだ。そんなひめゆり学徒隊の生存者22名の年齢も、今や70歳をとうに過ぎ、80歳前後。まさに「今、作らなければ。今、伝えなければ」……。

第5章

これこそ本当のおススメ！

ひめゆり学徒隊の最初の任務は……？

ひめゆり学徒隊の屈託のない少女たちは看護要員として従軍したのだから、赤十字の旗で守られた安全な病院で看護業務に従事するものと考えていた。しかし、それが全くの幻想だったことはすぐに明らかに……。

彼女たちに与えられた最初の任務は、横穴の壕を掘って2段ベッドや治療スペースをつくるという、いわば土方作業！ もっとも、そんな作業でも彼女たちにとっては、みんなが力を合わせて国のために何かをなし遂げているという充足感でいっぱいだったことは、証言者たちの証言を聞けば明らか……。

沖縄への水上特攻として片道だけの燃料を積んだ「戦艦大和」が、大量のアメリカ機の攻撃を受けて沈没したのが4月7日だから、彼女たちが病院壕づくりに精を出していたのは、客観的には日本がほとんど絶望的になっていた時期。そんな時期に、病院壕づくりの土方作業に駆り出され、いざ戦闘が始まるとたちまち地獄のような状況におかれてしまった彼女たちは、いわば国家による騙しの被害者そのものだが……？

「ひめゆりの塔」とは……？

中年以上の日本人には、①神風特別攻撃隊、②戦艦大和の沖縄水上特攻、③特殊潜航艇回天と並んで、④ひめゆりの塔は結構有名……？ しかしそれは、1947年4月7日に陸軍病院第三外科壕の跡に立てられた慰霊碑である「ひめゆりの塔」の存在によってではない。それは、戦後①今井正監督、②舛田利雄監督そして③神山征二郎監督らによって映画化された『ひめゆりの塔』の映画が有名になったため……？

激戦の地沖縄では、ひめゆり学徒隊だけではなく、いろいろな学校から集められた学徒隊がたくさんあり、それぞれの所属校にちなんだ名称がつけられていたため、その慰霊碑もたくさんあるとのこと。したがって、「ひめゆりの塔」もその1つにすぎないのだが、1949年に石野径一郎が書いた小説『ひめゆりの塔』やそれを基にした戯曲や演劇によって、一躍「ひめゆりの塔」が有名になったわけだ。もっとも、実物は高さ数十センチメートルの小さな塔らしいが……。

激戦の中、各病院壕は……？

この映画は、「ひめゆり学徒隊」として散っていった少女たちの顔写真と略歴を紹

介しながら、22名の証言者たちの証言によって、各病院壕の様子や学徒たちの死亡の様子が語られていくもの。その様子はあなた自身の目でしっかりと確認してもらいたいが、徹底的な艦砲射撃と空爆の後、陸上部隊が上陸したのが3月26日。その後4月から5月中旬にかけては日本軍との戦闘が続いたが、5月24日には沖縄守備軍司令部は南部島尻地区への撤退を決定した。この時点で日本軍は約80%を消耗しており、以降は組織的な抵抗もできないまま、6月22日には沖縄守備軍司令官牛島満中将らが自決したことによって、沖縄守備軍の指揮命令系統は完全に消滅することに。そして、6月25日には大本営が沖縄における組織的な戦闘の終了を発表した。

こんな動きの中、5月25日には陸軍病院そのものも南部に撤退することを決定。そして、6月18日には「解散命令」によってひめゆり学徒隊たちは何ともひどい仕打ちを受けることに……。

ひめゆり平和祈念資料館の設立は……？

ひめゆり学徒隊の生存者たちが、ひめゆり同窓会の先輩や多くの支援者の支援のもとにひめゆり平和祈念資料館を設立したのは、1989（平成元）年のこと。そしてこの資料館では、ひめゆり学徒隊の生存者である館長の本村つるさんなどが、この映画のラストに見られるように直接来館者に説明していたとのこと。しかし、「語り部」たちの高齢化により、2004年4月のリニューアル以降は証言映像の上映に切り替えられたとのこと。ちなみに、鹿児島の特攻基地知覧で、特攻遺品館が建設されたのが1975（昭和50）年。そして、現在の知覧特攻平和会館に改装されたのが1987（昭和62）年とのことだから、ひめゆり平和祈念資料館の建設は少し遅れている。私は以前からこの両者とも見学したいと思っているが、未だその機会に恵まれないのは残念だが、少なくともさまざまな戦争映画やドラマを観る中、1年に数回は「あの戦争」を考えている。今、平和な時代に生きる若者たちこそ、誰かのアドバイスを受けてこういう施設があることを知り、是非訪問してもらいたいものだが……。

いくつかのキーワードだけ

この映画は自分の目で観て、また自分の耳で証言者たちの証言を聞くことによって、何をどのように感じ取ることができるかが問題。沖縄戦の全貌を知るためにはかなりの勉強が必要だが、この映画は特別な知識がなくても、観ているだけで十分理解でき

るはず。したがって、この評論では証言者たちの証言は特に紹介しないが、いくつかのキーワードだけ紹介しておきたい。

映画前半のそれは、「看護」と「病院壕」。これはひめゆり学徒



©プロダクション・エイシア

隊員たちの仕事を表現するキーワード……。そして後半のキーワードは、「青酸カリ」と「手榴弾」。これはギリギリの局面で自殺するための道具だが、少女たちがどんな覚悟でそれぞれ決死の行動をとっていたのかがよくわかる。そして大問題は「解散命令」。これは病院壕から出ていき、1人1人の責任で行動をとれというメチャクチャな命令だが、その命令を受けて少女たちはどんな対応を……。そして最後は「お母さん」。せめて死ぬ前にもう1度お母さんに会いたい、そう思った少女たちはどんな行動を……？

そんなキーワードを参考にしながら、15～19歳の少女たちの心の叫びをしっかりと受け止めたもの。今、この年頃の娘さんをもつ父親・母親が娘と一緒にこの映画を観れば、親子間の対話も生まれ、日本の世の中も少しは変わるのでは……？

ナナゲイに拍手！

『スパイダーマン3』（07年）や『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』（07年）のようなハリウッド大作や、松本人志監督の『大日本人』（07年）のような話題作は、事前の大量宣伝を受けてシネコンで上映されるが、6月6日に観た『ヒロシマナガサキ』やこの『ひめゆり』のような地味で重たい映画は、観客を集めるのが難しいため、それを上映するのは勇気があるはず。大阪でそういう映画を上映するのは、シネ・ヌーヴォとナナゲイこと第七藝術劇場の2館だが、『ヒロシマナガサキ』と『ひめゆり』は第七藝術劇場で、7月と8月に上映されることになっている。ナナゲイの「英断」に拍手を送るとともに、1人でも多くの人たちに『ヒロシマナガサキ』と『ひめゆり』を観てもらいたいものだ。 2007(平成19)年6月22日記